「互近助（ごきんじょ）の心」で、安全・安心なまちづくりの取り組み

東京都昭島市　コミュニティ協議会「まちづくり昭島北」

【活動の概要】　東日本大震災前年の平成22年から、地域の防災力向上、生活環境の改善、安全で安心なまちづくりを目指し、コミュニティ協議会として活動を続けています。

昭島市の青梅線北側に位置する、11階～15階建てのマンション群の地域で、約3350世帯、7000人が暮らしています。5つの自治会、店舗会と連携し、地域の様々な課題に取り組んでいます。

今年で第45回を迎えた「ハイツまつり」は、今では8000人以上が集う地域の伝統行事となりました。約80人の役員が3か月の準備期間を経て、まつり運営に携わることで、地域全体のチームワークの向上につながり、"人づくり"の確かな流れとなっています。

東日本大震災を契機に、立川断層をテーマとした講演会を3か月後に開催して防災意識を高めるとともに、オリジナルの安否確認シートを6か月後に作成して全戸へ届けました。こうした「互近助の心」による安全・安心なまちづくりの取り組みを紹介します。

「防災の担い手」＝中学生と共に、安否確認を中心とした防災訓練を14年間継続

住民の半数以上が65歳を超える超高齢社会を迎える中、地域の未来を見据え、平成25年から隣接する中学校と協働し、毎年9月に防災訓練を合同で実施しています。

当日は、校庭に集まった全生徒が訓練内容を確認した後、それぞれが所属する自治会に移動します。その後、建物ごとに住民と一緒に全戸の安否確認など、様々な防災訓練に参加します。



毎年9月に中学生と地域が合同で防災訓練を実施している



コロナ禍の際には、「3密」を避けるため、専門家を招いた防災講演会の内容をYouTubeで配信しました。中学校や各家庭で視聴してもらうとともに、講演内容をテキスト化して配付もしました。

また、中学生を対象に「防災教室」を開催し、地域との合同訓練の意義を伝えています。さらに、「炊き出し訓練」の一環として、地域の夏祭りに中学生を中心とした模擬店を出店。教員の協力を得ながら、カレーうどんの調理から販売までを生徒自身が担当しています。


平成24年から防災隣組活動を続けている

被災地を訪問し、震災・減災の取り組みを学び、地域に活かす

「自然災害の"教訓"と"真実"は現場にある」とのアドバイスを受け、平成29年から神戸・加古川、福島、宮城、岩手、能登などの被災地を訪問してきました。

平成31年には地域の有志がバスで福島を訪れ、飯舘村、相馬市、福島第一原発周辺の関連施設などを視察しました。

被災地の方々から直接話を伺い、震災後の復興や防災・減災の取り組みを学ぶことで、得られた知見を地域の防災活動に活かしています。

平時は見守り、災害時は安否確認を行う「防災隣組活動」の継続

東京都の「防災隣組」制度を受け、地域でも平成22年から準備を進め、平成24年から活動を開始しました。平成26年4月には東京都防災隣組の認定を受け、現在も毎年の防災訓練で中心的な役割を担っています。昨年は2回、NHKの番組で「防災隣組活動」を紹介していただきました。

平時には住民同士の見守りや交流を行い、災害時には安否確認を行うなど、超高齢社会における地域コミュニティのつながりを支える活動の一つとして機能しています。

また、住民全員に個別のネック式ネームプレートを配付したことをきっかけに、「あいさつ運動」も活発になりました。

令和6年8月には、防災隣組結成10周年を記念する防災講演会を市民会館で開催。隣組役員の防災意識をさらに高めるとともに、活動を継続・発展させていくための新たな一歩となりました。

自然災害時は「在宅避難」を原則 ——マンション防災の取り組み

各自治会が毎年実施する防災訓練では、

①平時の備えとして、防災隣組活動、防災マニュアルや広報による防災意識の向上・啓発

②震度5強以上の災害発生時の備えとして、「発災時、死者ゼロ」を目指した全戸の安否確認、自宅からの2方向避難

③在宅避難の備えとして、在宅避難カード等の運用訓練、行政との連携、トイレ対策、などを確認しています。

また、避難所への避難が必要となった場合に備え、隣接する小・中学校ごとの避難所運営委員会(行政・学校・地域)にも参加し、事前準備や避難所の設置手順などについて、毎年確認を続けています。

東日本大震災を風化させないため ——3・11「まち歩き」を毎年実施

平成26年から毎年、東日本大震災を風化させず、震災から得た教訓や自助の備えの大切さを次世代につなぐため、「東日本大震災3・11を忘れない『まち歩き』」を実施して

います。

周辺地域を歩きながら、防災上の課題や日頃の備えを確認した後、防災講演や意見交換を行い、最後に発災時刻に合わせて黙とうを行っています。

今年は、神戸、和歌山、能登、宮城の被災地の皆様とZoomでつなぎ、震災当時の状況や、命を守るための日頃の備えについて貴重なお話を伺いました。

住民の手づくりによる「ハイツまつり」を毎年実施

昭和57年から始まった「ハイツまつり」は、今年で第45回を迎える地域最大のイベントです。4月後半に祭典委員会を発足させ、住民が中心となって準備・運営を行っています。



ハイツまつりでは、炊き出し訓練の一環で中学生がカレーを調理し中学生の店で販売している

約20の模擬店はすべて住民による出店で、2日間の参加者は8000人を超えます。開会式後のビンゴ大会には約2500人が参加します。

近隣の保育園、小学校、中学校の皆様による演奏や踊り、参加者全員を対象とした盆踊りなど、多世代が交流できる地域の一大イベントとして親しまれています。

また、運営のリーダーも数年前から若返りを進め、現役世代へ徐々にバトンタッチしています。

地域安全への取り組み

JR昭島駅北側の開発が進み、日常的に交通渋滞が発生していたことから、周辺道路の交差点にある信号機やガードレールなどの総点検を実施し、行政機関に改善を要望しました。その結果、数年後には改善が図られました。

現在は、隣接する元ゴルフ場跡地で大型物流施設の建設計画が進む中、スクールゾーンの安全対策や防犯カメラの設置など、住民の安全確保に向けた要望活動を行っています。

地域のつながりを育む取り組み

男性の地域デビューの場として、「男の料理教室」を定期的に開催しています。前回は炊き出し訓練の一環として、芋煮とアルファ米を使った焼きおにぎりを作りました。

昨年は、地域内の店舗会周辺で、各自治会から炊き出し用の大鍋を持ち寄り、「芋煮大会」を開催しました。多くの住民が参加し、世代を超えた交流の場として、大いに喜んでいただきました。

また、小学校区で開催される地域の運動会への協力や、小学校の登校時の見守り活動などにも取り組んでいます。こうした日頃の活動を通じて、地域の様々な団体や世代との対話と交流を深め、顔の見える関係づくりをこれからも進めてまいります。

（コミュニティ協議会「まちづくり昭島北」委員長　宮田次朗）



本協議会の総会時には、市長や教育長も参加いただき、行政・学校・周辺企業と共の活動で地域全体のチームワークの向上につながっており“人づくり”の確かな流れとなっている

まちづくり昭島北12年の歩み→